

# バリクバヤンの友人

梶山貴史

ある国際協力機関主催の無償資金協力事業でのボランティア活動がきっかけで、現在の私にはフィリピン人の親友が何人かいる。しかし、バリクバヤン (Balikbayan) として、海外で主に出稼ぎをしているフィリピンの人々に対する私のイメージは、彼らの事情を知る以前は良くはなかった。

私が初めてフィリピンを訪れたのは大学四年の卒業間近の春休みで、いわば卒業旅行のようなものだった。私が参加した事業の討論会で、たまたま目の前の席に座ったフィリピン人が私の親友(友人A)となり、友人Aなどを通じて「芋づる式」に知り合が増えていったのだが、祖国を熱心に紹介する友人Aの話聞いて、私はそのうちにフィリピンに行ってみたくなくなった。「百聞は一見にしかず」という理由でも。

フィリピンの玄関口であるマニラのノイ・アキノ国際空港に着き、税関を通り抜けると、日本出国前に予め指定された場所で、友人Aは私の到着を待っていた。だが、私を待っていたのは友人Aの他、その兄、妹と大勢の友人であった。友人Aが知り合いに私のことを予め話していたため、彼らが私に会いにくくなったようであった。

私はマニラ市内の友人A宅に泊まることとなったが、そこでは初対面にもかかわら

ず、友人Aの友人の他、両親、兄弟、親戚までも私の訪問を歓迎してくれた。様々な人々に話しかけられ、また紹介されるため、人見知りをする私でもここでは気持ちをおーブンにする必要があった。更に、UAEのドバイから出稼ぎで帰国したばかりの友人Aの兄は、「買ってきたブランドでも一緒にどうだい？」と飲物も勧めてくれた。

その初めてのフィリピン滞在から既に何年も経過したが、友人Aをはじめ「芋づる式」に知り合ったフィリピン人の知人などは、バリクバヤンとして世界中に散らばってしまった。ミンダナオ島出身の友人Bは電力会社勤務だったが辞め、アメリカのLAにあるガソリンスタンドでのアルバイトなどを経験した後、全米規模の慈善団体で仕事をしている。また、オーストラリアに住む両親の仕送りで生活していた友人Cは、現在はドバイの保険会社に勤務している。

また、国連職員を目指して日本、更に昨年からロンドンでの研究生活をスタートさせた友人Dもいるが、その父はカナダ国籍で、カナダのサスカチュワン州の大学で教鞭を執っている。その父曰く「フィリピンでは仕事が無いためにフィリピン国籍を捨て、家族の生活を支えるためカナダ国籍を取得した」と。友人Dが「何年も家族全員

が一緒になったことはない」と私に語ったことが、今も鮮明な記憶として残っている。

前述の友人Aはイランのテヘランで、イラン人男性と結婚したフィリピン人女性の訴訟問題に関する仕事をすることになったため、私はそのつてを頼りにテヘランを訪問できた。友人Aがカソリック教会に行くとのことで、私(クリスチャンではないが)もついて行った。イランはイスラーム教徒が大半の国だが、教会を訪れていたフィリピン人の方々の絆は強く、連帯意識が感じられた。故郷の生活を話す人、祖国に残した家族を懐かしむ人、異国での苦労話をするフィリピン人に数多く出会ったのだ。

フィリピンに私が初めて行った際に彼らは、当地での不安を隠せなかった私と、バリクバヤンとしての自身とを重ね合わせ、思いやりの心で私をもてなしてくれたのは、とその時感した。自国での生活が厳しく、バリクバヤンとして海外に行かざるを得ない現実を痛感し、彼らに対する当初の稚拙なイメージは消えていった。但し、バリクバヤンの原義は、帰る (Come) + 祖国 (Bayan) で、祖国に戻る人、フィリピンの家族にいつか会える人々でもある。

(すぎやま たかし/アジア経済研究所 研究支援部)